

第1回特色ある県立高校づくり懇談会

議事録

高校教育課

【事務局】

おはようございます。

定刻となりましたので、ただいまから第1回特色ある県立高校づくり懇談会を開会いたします。本日はご多忙のところ、ご出席を賜り誠にありがとうございます。私は会議の進行を務めます、長野県教育委員会高校教育課高校改革推進の今井と申します。どうぞよろしく願いいたします。開会にあたり、長野県教育委員会の内堀教育長よりご挨拶を申し上げます。

【内堀教育長】

皆さん、こんにちは。長野県教育委員会教育長の内堀繁利でございます。

本日は、第1回の特色ある県立高校づくり懇談会を開催いたしましたところ、ご多用中にも関わらず、会場、オンラインでのご参加、誠にありがとうございます。現在、長野県教育委員会で進めております高校改革は、今からちょうど10年前、平成25年に教育委員会事務局内で検討を開始いたしました。その後、産業教育審議会あるいは将来像検討委員会等を立ち上げ、そこから答申ですとか審議のまとめというものをいただき、それを受けまして、長野県教育委員会で今般の高校改革の骨格を示す「高校フロントランナー改革 学びの改革 基本構想」というのを平成29年に決めました。そしてそれをより具体化した「高校改革 ～夢に挑戦する学び～実施方針」というものを翌平成30年に作成したところであります。今進めている様々な改革あるいは計画は、この基本構想、それから実施方針に基づいて進めているものであります。そしてこの1月、全ての個別の計画を成案とさせていただいたところであります。今、新校ごとに懇話会を立ち上げて、どのような学校を目指すのか、どのような連携をしていくのか、校舎はどうするのかといった議論を進めていただいているところでございます。

一方でこの実施方針、平成30年の実施方針の策定から4年半以上5年弱が経過しまして、VUCAと言われるこの変化が激しく予想困難な時代に、教育委員会、それから学校もですが、様々な情報ですとか様々な知見を取り入れて学校づくり、改革を進めているところですが、例えば、新型コロナウイルスの感染症の世界的拡大ですとか、ロシアのウクライナ侵攻ですとか、あるいは最近話題になっておりますChatGPTを始めとするAI、科学技術の急速な進展、こういったものはこの実施方針の策定後に起きたことであります。一定の予想はできたというには思いますけれども、その影響の範囲の大きさですとか急激さというものは多分、我々の予想を超えていたものではなかったかというように思っているところであります。それから、この3月には今年度から5年間の長野県の教育の大きな方向性を示した教育振興基本計画を定めたところであります。そういった情勢の中で、長野県というのはいちおう広い県土にありまして、その広い県土に様々な高校が存在、存立しております。全日制、定時制、通信制それから普通科、職業科、特色

学科、総合学科、それから都市部にある学校、地域にある学校、それから県境にある学校、様々な学校が存立しております。それらの学校の一層の魅力化・特色化、これについて様々なお立場の有識者の皆さんから幅広くご意見を頂戴するためにこの懇談会を立ち上げたということであります。この回は、会として何か取りまとめをしていただくというようなことは考えておりません。皆さんからいただいた様々なご意見を教育委員会で受け止め、整理をし、取りまとめ、それで現在進めている新校ごとの懇話会での議論、あるいは既存校の特色ある学校づくり、それからさらには予算要求、そういったものに繋げていきたいというように考えているところでございます。今回の運営につきましては、できるだけ皆さんの発言をする時間をとるということで、いろいろなものを多少省かせていただいているところもありますけれども、ぜひ自由闊達で素晴らしいご議論をいただけるようお願いを申し上げまして冒頭のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

【事務局】

次に、構成員の皆様のご紹介をさせていただきます。本来であれば、お1人ずつご紹介をすべきところがございますが、時間の都合もありますので、お手元に配付をした名簿をご覧ください、紹介に代えさせていただきますと思います。ご確認をお願いいたします。また、開催要項第2の3によって、本会に座長を置くことになっておりますけれども、信州大学の村松教授にお引き受けをいただいておりますので、ご報告を申し上げます。なお、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事の岩本様、松本市教育委員会教育長の伊佐治様はオンラインで参加ということになります。また、本日、KOA株式会社取締役会長の向山様、株式会社ナイアンティック クリエイティブディレクターの野村様は欠席ということになっております。

本日、オブザーバーとして阿部知事にも出席をいただいております。

会議事項に入る前に、本懇談会の報告についてご説明をいたします。

本懇談会につきましては、会議を公開で行うとともに会議資料及び議事録、また撮影した写真等について、県のホームページ等へ掲載するとともに希望する構成員の皆様へ写真の提供をいたしますのでご承知おきください。

また、懇談会の模様をライブ配信させていただくとともに議事録を作成するため録音させていただきますので、併せてご承知おきいただきますようお願いいたします。

次にお配りいたしました資料の確認をいたします。

お手元には、「次第」、「第1回目配布資料」、本日欠席の向山様からご提出をいただいた「上伊那地域の高校の将来像について」の3つとなります。ご確認をお願いいたします。

それでは会議事項に入らせていただきます。進行は、本懇談会の座長、信州大学の村松教授をお願いをいたします。

【村松座長】

はい、それでは改めまして皆さんこんにちは。僭越ながら、座長を務めさせていただきます信州大学の村松です。どうぞよろしくお願いたします。

私自身も県内の県立高校の出身でありまして、現在、教育学部という教員養成を取りまとめるところにあります。そういった立場からも、この特色ある県立高校づくり懇談会において、どうやって県立高校の将来像を描いていくのか非常に重要な課題だと思っております。参加者の皆様と一緒に有意義な議論ができるかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは会議事項に入らせていただきます。本日のテーマでございますが、これまでの高校とこれからの高校ということで、まずはいろんな立場・視点から、忌憚のないご意見をいただきながら、入っていきたいと思っております。議論に入る前に、本日の会議資料を事務局からいただいております。事務局からご説明をお願いします。

【事務局】

高校教育課の宮澤と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

お配りした第1回目配布資料をご覧ください。こちらが本日の資料でございます。

こちらの3ページに本日の議題を掲げております。

本日は、「これまでの高校とこれからの高校」について記載のある様々な視点からご意見を頂戴したいと思っております。

また、その下に、第2回目のテーマを記載しております。

続いて4ページをご覧くださいと思います。現在の長野県の県立高校に対する地域の声、学校側の考えを端的に記載しております。それぞれの思いがある中で、県立高校が地域で果たすべき役割は何なのか。また、県立高校に求められる特色化とは何か、本日はそういったことについて、構成員の皆様から忌憚ない様々なご意見を自由に頂戴したいと思っております。

5ページ以降、参考資料として、県立高校に関する資料を添付してございます。構成員の皆様方には、資料を事前に送付しておりますので、ここでの説明は割愛いたします。

続きまして、本日ご欠席の向山様からご提出いただいた資料について、私から説明を申し上げます。お配りしてございます「上伊那地域の高校の将来像について意見提案」という冊子をご確認ください。

県教育委員会では、平成30年9月の高校改革実施方針の公表後も、県内12のブロックごとに高校の将来像を考える地域の協議会という組織を地域とともに立ち上げ、地元自治体、産業界、教育関係者等の皆様から、地域ごとに高校の将来像について意見提案をいただいております。これをもとに各地区の高校再編を含む改革を進めているところでございます。お手数ですが、冊子14ページをお開きいただきたいと思っております。長野県南部にございます上伊那地域の協議会に向山孝一様も委員としてご参画をいただきました。

その関係から、本日、向山様より今回改めて資料提供という申し入れがございましたので皆様にお配りを申し上げた次第であります。

この中には本懇談会の今後のテーマとなりうる内容につきましても幅広い記載がございます。本日は第1回目の懇談会のテーマ「高校とは何か」に関する箇所につきまして向山様の了解をもとに、この冊子意見提案より主な点を県教育委員会として抜粋して皆様と共有をさせていただいております。お手元の「K O A株式会社の向山取締役会長提

出資料」と表題に掲げてある1枚ものでございますが、そちらに黒い○を付けたものを6項目掲げてございます。こちらが、向山様も本日のご意見に代わるものということで抜粋まとめさせていただいたものであり、皆様と共有をさせていただきます。

事務局からの説明は以上でございます。よろしく申し上げます。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。資料を踏まえて意見交換をしていただければと思います。

意見交換に入る前に、オブザーバーであります知事にご出席いただいております。是非、本懇談会に対する期待を伝えていただければと思います。

【阿部知事】

皆さん改めておはようございます。

明るい雰囲気で作らないと、見ている保護者の方や子どもたちが心配になっていけないので、ポジティブな雰囲気の懇談会にしていきたいと思っております。よろしく申し上げます。

先ほど教育長から話があったように、県立高校のあり方は、全体の人口減少の中で高校再編の議論をしてきています。教育委員会の努力と地元の皆様のご理解ご支援の中で、どことどの高校を統合するというような話はまとまってきております。私の問題意識もそれから地域の皆さんと話して感じているのは、人口減少の中で学校の統廃合は仕方がないが、長野県の高校教育はどこに行くのか、どんな特色を持つのか、私達にとって望ましい改革になるのか、これは県民の皆さん、保護者、子どもたち共通する思いだと思います。

そういう意味で、県立高校の特色づくりをどうしていくかということをお皆さんには真剣に議論いただき方向づけをしていただきたいと思います。

私はオブザーバーなので、議論中は発言をできるだけ抑制します。

教育の内容は教育委員会の責任ですけど、なぜ私が出席しているかということ2つ大きな理由があると思っています。

一つは、教育予算は他の分野との関係で、私が増やそうとしないと絶対に増えません。ですから予算に関わる話については、私も皆さんの議論を知っておく必要があるし、逆に皆さんからの県の予算をこういふことに使いたいという話は、私が責任をもって対応したいと思います。

それから、子どもたちの教育、学校のあり方は、これから地域社会がどうなっているのか、あるいは産業界がどういう人材を求めているのかということに、非常に密接に関係します。

私は総合行政を担っている県知事の立場でありますので、学校の中と外の繋ぎの部分はまさに私も教育委員会と一緒に考えて考えなきゃいけないというふうに思います。そういう意味でぜひそうした観点を私としてはしっかり持ちながら、オブザーバーとして、少し控えめにしながら参加したいというふうに思っています。皆さんへのお願いはぜひ、本当に世の中が大きな変革期です。社会はどんどん変わっています。20年前の常識

は今や非常識だと私は思ってますので、そういう意味で教育の常識っていうものも、もう1回原点に立ち返って考えていくということが極めて重要だと思っています。

そういう意味であんまり既存の枠にとらわれない議論をしていただけるとありがたいなというふうに思ってますし、それから、どうしても教育の議論をみていて私が感じているのは、理念ももちろん大事なんですけれど、もうすこしプラクティカルに、実際に学校をどうするとか、どういう学校にしなければいけないのか、子どもたちは何を求めているのか、地域は何が必要なのか、そういう実際的な議論の方向性を共有いただければありがたいなというふうに思います。

ちょっと私の問題意識だけ簡単に。政治家として選挙で選ばれてる立場でちょっと問題提起したいと思います。

ずっと県内回らせていただいて県民の皆さんと対話集会やってます。市町村長がテーマを設定するのでいろんなテーマが出てきますが、必ずどこでも出てくるご意見は子どものご意見です。

これは子育ての話もあれば、教育の話もありますけれども、特に教育についていろいろ出てくる中で、私が共通しているなと思ってるキーワードは、「選択肢がない」と言われます。これは不登校の子が行かれるフリースクールがないとかですね、あるいは、例えば進学をバンバン目指したいけれどももっと国立大学とかに進学できるような教育やってくれとかですね、いろんな意味がありますけれども、発達障がいということもそうです。いろんな意味で都会と比べるとやっぱり選択肢がない、多様性がないということが、かなり県民の皆様とのほとんどコンセンサスだなというふうに思います。そういう意味でぜひこの多様性、選択できるそうしたことっていうのは、一つ重要なキーワードではないかというふうに思いますし、あと私はずっと感じているのは、いま教育委員会では個別最適な学びと言われてますけれども、やっぱり子どもたちはいろんな特性あるいは強み、個性を持っていますので、既存の世の中の価値観に子どもたちが合わせるんじゃないで、でも子どもたちが持っている特性をどうやってこれからの世界において活かせるように育て上げていくかっていうことが求められてるんじゃないかなというふうに思います。個別最適性ということも重要なキーワードではないかというふうに思います。

私は教育委員会にそもそも高校って何っていうことを投げかけています。

今日のテーマはそういうテーマになってるんですけども、義務教育ではないのに、ほとんどの子どもたちが進学している。これをどういうふうに考えればいいのかというふうに思いますし、それから中学校は大体今は高校に進学するかと思うんですけど、高校の場合は就職する子もいれば進学する子どももいる。高校の役割、あり方っていうのはそのこと自体をどう考えるかということが、実は重要になってきてるんじゃないかなというふうに思ってます。

それから地域とか産業の話先ほど少ししましたが、地域の皆さんとか産業界の高校に対する期待は非常に強いです。これは保護者の皆さんとか子どもたちの期待が大きいと同時に人口減少の中で地域社会をどう維持発展させるのか、あるいは様々な産業分野をどうやって発展させるのか、その観点でのその人材育成、特に地域に密接に関わるような高校に対する期待が非常に大きなものがあります。ぜひ、そうした地域とか産業界からの期待という観点をもちながら、議論いただければありがたいと思います。

先日もある市町村長と話しましたが、県境の高校についてです。県境の子どもたちが県外の高校に行っちゃってる子が結構いる。「これ見過ごしていいんですか」というふうに私は言われました。結構危機的だと私は思っています。

長野県の子どもたちが県外の高校にどうしていかなきゃいけないのっていうのはいろんな課題を含んでいるんじゃないかなというふうに思います。

そういう意味で地域にとって産業にとっての学校のあり方ということもぜひ念頭においていただければありがたいと思ってます。いろんな特色があると思いますけれども英語で学べる学校であったり、あるいは中高一貫であったりですね、全国募集だったり、いろんな観点があると思います。

いずれも実行するとすれば予算が必要になってきますけれども、私は今のどんどん子どもの数が減っている世の中で、教育に対してもう1回しっかり投資をするということが子どもたちにとっても必要だというふうに思いますし、あわせて長野県にとっても最も重要な政策テーマだというふうに思ってます。

私は、東京都立西高等学校の卒業生でありますけれども、都立西高校前身の府立第十中学校初代校長が白沢清人先生という方でした。現在の県立長野高校に行くと校長室に歴代の校長の名前が掛かってますけれども白沢校長は旧制長野中学の校長先生だった方です。なぜか。当時の長野県の教育は、日本全体の教育にすごい影響を与えていたというふうに思います。

まさに今教育の変革・改革が求められている中で、ぜひ長野県から教育を変えていきたい。そして小中学校は市町村立ですから、ちょっと違いますけれども、ぜひこの直接的に県が関わっている県立高校のあり方から皆さんと一緒に教育のあり方全般に影響を与えうる、そして、子どもたちにとって最も望まれる未来志向の改革をしていきたいというふうに思ってます。

県外の皆さんもいらっしゃいますけれども、国宝松本城の隣に旧開智学校という昔の教育建築が、令和元年に国宝に指定されています。地域の皆さんの寄付でですね、素晴らしい学校が作られています。まさに長野県は地域の皆さんが教育に対して深い関心を持ち、一緒になって支えてきた県だというふうに思っています。そういう意味でぜひ長野県から新しい教育のあり方を考えていきたいというふうに思っていますし、また開智学校は当時の教育建築としては、非常に斬新だったんですけど、斬新というのはやっぱり子ども達が学ぶという場所として、どういうものがふさわしいかというのを考えた結果があのようになっているのだと考えられます。

長野県スクールデザインということで教育委員会を中心に進めてきてもらってますけれども、例えば子どもたちがどういう場で、あるいはどういう形で学ぶのかということも、もう昔の発想とは世の中大きく変わってきていると思います。そうしたことも含めてぜひその特色ある県立高校とはどういうふうにあるべきなのかということをご議論いただきたいと思えます。熱が入りすぎて申し訳ないですが、県知事の立場としてしっかりとコミットさせていただきたいと思えますのでどうぞよろしく願います。ありがとうございます。

【村松座長】

知事ありがとうございました。知事の熱を感じるありがたいお話をいただきました。今お話いただきましたポジティブで明るくということですので、そのような会にしていければと思います。

知事から、学校の中と外、それぞれの立場からまた多様性とか、個別最適な学びっていうのがこれからのキーワードになります、このような話がありました。高校って何というのは、本日の大きなテーマでございます。

長野県から変えていきたい、そういったことに私どもは応えていきたいと思ひますし、理念の議論だけじゃなくプラクティカルな議論ですね。大きく投資もというお話もいただきましたのでこの教育論だけではなくてですね、具体的な施策そのものに会の話が最終的に行き着き、そして知事にどっと予算をいただいてですね、具体的に教育を変えていけるような方向の会になればいいかと思ひております。よろしくお願ひします。

では早速意見交換に入らせていただきます。

先ほどの知事からもいただきましたように特に指名等はさせていただきます、自由にご発言いただければと思ひます。と申しましてもいきなりこう言うちょっと難しからうということもござひます。

先ほど向山様からも資料をいただきました。また、事務局様からの資料で4ページですかね、大きく分けると「地域の声と学校の思ひ」という、先ほど知事の「中と外」というそういうところで、大きく声がわかれておると思ひます。まずはですね、ぜひこの地域の声、産業界ですとか地域連携、そういうお立場からぜひちょっとご意見をいただければと思ひます。また、向山様からいただいた資料についてでも結構ですし、自由にいただければと思ひます。まず、いかがでしょうか。ぜひ、積極的にいただければと思ひますが。

【安原 構成員】

塾講師をしている安原です。よろしくお願ひします。塾と言ひましても、いわゆる大手の塾ではなくて、個別でやってる小さな塾です。その代わり、私は小学生から高校生までを、一応、一貫して自分で見てきました。それで彼らの声等を聞いてきましたので、何か全く門外漢ですが、言ひ伝えたいなと思ひまして、アンケートをこの会に先立ちまして実施しました。本当に簡単な白紙1枚です。「高校に望むことある？」と。高校生と中学生に出しました。彼らの回答にはいろいろありますが、やはり「高校が見えてこない」と。これは子どもたちの共通の悩みだと思ひます。だから高校を選択する上で、高校に入ったらどういふ企業に入っていくのかといったことが、特に公立高校では見えてこない。ちょっと耳の痛いことを言うかもしれませんが、塾の人間からみていて、私立は今ものすごく頑張ってます。説明会を開いたり。私は東京でも塾をやっていたことがあります、東京でも特に私立というのは説明会を開いており、私のいる松本でも私立は説明会をします。高校はもしかするとパンフレットもない。これからは、やはり一つは、もっと広報活動を。わかりやすい高校にしてもらふのも大事だと思ひます。子供たちの意見ですね。その一部を紹介させていただきます。

【村松座長】

ありがとうございました。まずは安原様から、「高校の姿が見えてこない」というご指摘をいただきました。それに関連付けてでも結構ですし、その他、別の観点からでも結構でございます。いかがでございましょうか。

どうぞ。はい、山下様、よろしく願いいたします。申し遅れましたが、最初にご発言の際には、自己紹介等を入れながら少しお話しいただければと思います。よろしく願いいたします。

【山下 構成員】

長野県の北信地域の飯綱町というところでリンゴ農家をしております、山下フルーツ農園の山下と申します。私もちょっと長野出身ではなくてですね、長野県の高校を出ていないので、今回この構成員に選出していただいた中で、長野県の高校についてちょっと調べてみようと思ったんですけれども、先ほど安原構成員もおっしゃられたとおり、情報が何もなくて、私立の高校はいくつかホームページを持っていて、いろいろと見る事ができたんですけれども、公立高校はどんなことをやっているのかっていうのがちょっと見えなかったです。あと、やっぱりそうなってくると、その偏差値であるとか、大体どこぐらいのレベルの子だとこの高校に行くっていうのが筋になっているというか、っていうふうになんかちょっと感じた部分があります。

地元ですね、高校が二校あるんですけれども、そちらの方はリンゴの学習を1年生のときにしております。その中で、地元の保育園の子と一緒にリンゴの収穫作業をしたりですとか、地元の小学生と一緒に作業をしたりっていうことをやっていて、結構面白い活動だになっていうふうに見ているんですけれども。おそらく広報活動というか、こういうことやってますよっていうのは、あまり知られていないんじゃないかなって思っています。そういったことも、もっと発信すればちょっと面白いかなって入ってくる学生さんなんかもあるんじゃないかなっていうふうには日頃感じておりましたので、そういった情報発信することっていうのは非常に大切なことかなと思いました。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。続きまして情報発信の大切さについてご指摘いただきました。その他関連したところでも結構です。それでは小木曾様よろしく願いします。

【小木曾 構成員】

坂城高校で教員をやっております小木曾と申します。情報が見えてこない高校現場代表でちょっとお話をさせていただきますが。情報の公開が多分弱いのも一つの要因だと思うんですけど、そもそも発信すべき情報が弱い、コンテンツの方にも問題があるのかなっていうのは思っています。今、多分中学生が高校選ぶときに、どうやって選ぶかっていうと、5教科の学力の点数でっていうのはすごく大きな要因なんだと思います。多分それではだめで、そうではない方向性を、きっと特色あるという形で目指しているんだと思っています、それはまだ現場のところにはかけているかなと。

例えば、勤務している坂城高校の普通科なんですけど、学習に関してはなかなかうまくいかなかった経験を持った子たちもたくさん入ってくるんですけど、普通科の学習の

中でも、ICTを3、4年前から早めに取り入れまして、「こんな学習してます」って情報発信をしたところ、「そういうやり方だったらやってみようかな」っていう子たちも集まるようになったように思います。なので、普通科かける何かみたいな特色科は、そうですね専門科みたいなそれが売りになるかなと思うんですけど。普通科であっても、学校として、こんなやり方で可能性を伸ばしますというような武器がないと、やっぱりその情報公開っていうところまでたどり着かないのかなっていう、なかなか、学校の中側にいて至ってないところが多いなと思う部分です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。広報、情報発信の問題も、そもそも発信する中身ですね。そこがまだまだ不十分で。そこは多分、今日のテーマの魅力化、そのもののお話になろうかと思えます。この辺にかかわっては、どうでしょう。多分積極的にそういった情報発信とかやられています、堀井様や赤荻様たちの方では、いかがでしょうか。

【赤荻 構成員】

初めまして、渋谷女子インターナショナルスクール校長の赤荻と申します。よろしくお願ひします。渋谷女子インターナショナルスクールは、今年の4月に開校したばかりで、私も教育業界に携わって本当まもなく、まだまだ勉強中なんですけれども、10代の頃から、10代の子向けのコンテンツを作るお仕事をしてきたので、若い子の意見は、わりとわかる方かなと思ってます。

私、今年の3月まで原付で日本1周をしながら、自分の高校の説明会を開いて回ってきました。なので、全国の中3の子の話をいろいろ聞いてきたんですけど、やっぱり、偏差値と距離で自分の行く高校を選ぶ子が多いなと感じました。ただ、この6月で、中学3年生の子たちが高校に入って2ヶ月ぐらい経って、私のSNSに、地元の高校に通い始め2ヶ月経ったけど、何を頑張ればいいのかわからない。何を頑張ればいいのかわからないし、何を目標として頑張ればいいのかわからなくて、すごく学校に行きづらい。できれば転校したいみたいなお話をいただくことが結構あります。

ちょっと話変わっちゃうんですけど、うちの高校（学校）に来る子で多いのは、元々中学生のときに、校則を守れないというか、守りたくなくて、そもそも何でそんな校則が厳しいのかとか、何でスカートは膝下じゃなきゃいけないのか、メイクしなきゃいけないのかっていう疑問を持った子たちが多くて、うちの学校では校則をみんなで作ろうということで、何もかもOKなわけではないんですけど、意味のある校則を生徒と一緒に作っていこうというテーマで今学校スタートしたばかりです。なので、知事の「長野県から変えていきたい」っていうお言葉にすごいしびれまして。すごいちょっとぶっ飛んだこと言っちゃうかもしれないんですけど、例えば、長野県の公立高校がメイクOKになるとか、本当にそれで日本の10代の子の未来が変わると思っていて、18歳になったら社会に出る女の子も増えると思うんですけど、社会に出たら、メイクはマナーなのに、高校では禁止されているっていう、すごい矛盾が起きているなと私は日々感じていて。

高校生の時にメイクをとことん勉強した子は、社会に出てからメイクで失敗しない、恥ずかしい思いはしないと思うんですけど、やっぱり禁止されてるので仕方がわからない

子ってすごい多いなと感じていて。ですので、私の学校ではメイクを授業の中に取り入れていきます。

また、日本一周している中で、地元の公立高校でメイクの授業がある学校は、佐賀県かどっかにありまして、1クラスしかないのですごく入るのが難しい。入るのが難しいので、そこに入れなかったら親を説得して、いっぱいお金出してもらって都内に進出しようかなみたいな感じで言ってる子もいたので、メイクに限った話になっちゃうんですけど、社会に出る準備、あと自分のしてみたいことをできるカリキュラムがある高校はやっぱり人気なのかなと思いました。すいませんちょっと話がずれちゃいました。

【村松座長】

ありがとうございました。日本を原付で回るといこともさることながら、今のお話を聞きながら、校則などの例では、一緒にルールを作るっていうことが非常にポイントで、きっと生徒さん自身が自立した生徒ですかね、社会に対して、自立していく、そういうようなことを非常に大事にされてるのかと思いました。ありがとうございました。堀井様お願いします。

【堀井 構成員】

白馬インターナショナルスクールの堀井です。よろしくお願いします。

今日は白馬インターナショナルスクールの看板を背負わせていただけていますが、実際は私はフリーランスで、全国でいろいろな教育活動やコミュニティのサポートなどもやりたくてやっております。

「やりたくてやっている」というのがお話のポイントで、私自身の話となぞらえながらですが、私2年前までは、横浜の実家の学校法人で20年間教育活動、教員も、学校管理職や法人管理職も経験し、退職しました。学校教育というもののイメージが皆さんには強くあると思います。私は自ら外に出て、法人の考えとは違う活動ができないかと思って、その冒険の旅に出て今2年目になります。

今赤荻さんがおっしゃったように、やりたいことがやれるかどうかはすごく大事です。私が今考えてるのは長野県の教育のポテンシャルは二つあると思っています。一つは若い世代、私はあまり「子供」という言葉を使いたくないのですが、若い人たちがやりたいことがやれるかどうか。我々が若い人たちを大事にできているかどうかはまずポイントだと思います。

やりたいことって何かということを考えながらもう一つに、長野県だからこそできる教育があると思います。今私は白馬に2年ぐらい通い続けております。コロナが終わって、例えば白馬インターナショナルスクールでは2017年からサマースクールを開催しているのですが、コロナの影が薄まった去年ぐらいからサマースクールに対する応募が急増しております。去年は海外からの参加は難しかったのですが、去年はその前の年の倍、そして今年はさらにその倍で100人以上の方々が白馬に来てくださるんです。

「やりたいこと」をちょっと混ぜてお話しいたしますと、今の県立高校で、長野県に限らず、月曜日の朝起きて学校にどうしても行きたいと思って行く生徒さんって何人ぐらいいらっしゃるんでしょうか。行きたくて行きたくてしょうがない、明日の朝はいつ来るのといって日曜日の夜を迎えるお子さんがどれだけいるかっていうことだと思うんですね。

白馬インターナショナルスクールのサマースクールに来るリピーターのお子さんがたくさんいます。白馬にも素晴らしい山があり、私は中央道を車で北上し、北アルプスをずっと眺めながら白馬の開けたところに入ったときにですね、「白馬優勝！」と思うぐ

らい美しい。また、青木湖という湖でサップ（SUP、Stand Up Paddleboard）をやるとい
うと、全員がやりたくなります。

白馬インターナショナルスクールの通常の学校生活でも、あれやろうって呼びかけを
しても、これはやるけどこれは別に嫌っていう子もいますが、やはり例えばサップをや
ろうとするとですね、もうみんなが当たり前のように、もう水に飛び込みたくてしよ
うがない、そこで自然を感じ、そしてどんなことが起きてるのか体感的に自然に学んで
るんですね。私が学校を辞めた理由の一つの学校教育のイメージが、あの白い箱の一辺
大体8mぐらいですね。教室に40個の机が綺麗に並べられて、わざわざ机を揃えなさい
ってぐらい並べますよね。それで並べて座らされている。私のいた法人は、横浜でい
くつか学校をもっていて、森の中にある素晴らしい学校なのに、その森から校舎を眺め
て窓から綺麗に並んだ高校生が見えたときに、思ったんです。「あの人たちを檻から出
さなきゃいけない」と。檻に入れられて、1日6時間もですよ。緑や素敵なお天道様の
恵みに溢れた森の中に出ないで箱の中に詰められているんだと思ったんです。

そこで、白馬に行ってみたら、白馬では山ほど子どもたちが駆け回る。白馬村でも人
口が増えたようでして、今もいろんな方、家族で旅行されるに来てらっしゃる方とかに
お会いしたり、去年移住してきた海外の方とかもいらっちゃって。でもみなさん、こん
なに素敵なおところにいるんだけど、やっぱり「学校が、学校が、、、」っておっしゃる
んですよ。

私は、子どもたちが「明日月曜日だ、学校に行きたい」って思えるような学校作り
て、長野県の素晴らしいリソースを使ったら絶対あると思います。もう一つは、そこに
生まれて育ててる子たちにどれだけ大事にしてやりたいことをやらせてあげられるかに
できるか。それって誰が知ってるかとしたら若い人本人なんです、私達じゃないんで
す。

本人たちと一緒に学校をつくることを、もし長野県でできたら素晴らしいなと思っ
ております。長々ありがとうございました。

【村松座長】

はい。堀井様ありがとうございました。

やりたいことをやれるかという。サザエさん症候群とは全く無縁な生徒さんたちになる
よう、長野県だからこそやれること、これから考える重要なテーマになるかと思いま
す。

そして先ほど赤荻様からもあった一緒にルールを作るという話に通じるところが、本人
たちが作っていく、生徒たちが作っていくというお話聞いて、なるほどなと思いま
した。

それに関係するところでもいかがでしょうか。オンラインの皆さんもぜひご意見があり
ましたら積極的にいただければと思います。

いかがでしょうか？

では伊佐治様お願いします。

【伊佐治 構成員】

松本市教育委員会で教育長をしております、伊佐治裕子と申します。どうぞよろしく
お願いします。今日はそちらに伺えなくてオンラインで申し訳ありません。

私も先ほどから伺っております、子供たちが高校で成人の18歳になりますね。
学習指導要領でも生きる力ということが叫ばれてきたのに、日本の学校教育を含めて、
生きる力ということが実際には子供たちについてないということが現実だと思いま
す。

子供たちが学校に行きたくて仕方ないという学校ができれば、自然に生きる力がつく学校が実現するのではないかと考えております。

そのために、私はいま義務教育を担当しておりますので、学校を何とか柔らかく変えていきたいと、先ほども校則を自分たちで決められる学校というお話がありましたが、子どもの権利を大切に学校を変えていきたいということで先生方と一緒に取り組んでいるところです。

先程、知事がおっしゃいましたけれども、高校というのは一応みんな子どもたちが選んでいくところですので、高校ではより義務教育よりもいろんなことが挑戦できるはずだっというふうに考えております。

そして、長野県が移住の人気ランキングで常に上位というので、その移住で選ばれる理由が、自然環境があると思っておりますが、もう一つ、やはりその世代の方が気になることとしては、教育環境はどうなのかということだと思っております。

そのことで、いま私たちも移住の方に選ばれるような教育環境を作ろうと、松本市でも取り組んでいるのですが、実は、そこで聞かれるのが、冒頭の話にも共通するのですが、「高校にちょっと魅力がないんだよね。」といろいろな方から言われることがあります。それが情報発信なのか、ハードが古い、校舎などが古いようなことにあるのか、そのへんの理由は分析していないのですが、そこは大きな理由になっていくのではないかと考えています。

私が普段考えていることなのですが、たとえば、N校だとかS校だとかが2万人を超える最大の高校になっていますよね。そして、先日、長野県民新聞で拝見しました、前から聞いてもいましたが、私立の通信制の高校に通う方が過去最大になっているということで、やはり、高校って、その学校に行き行って学ぶというスタイルを大胆に変えてもいいのではないかと、公立高校であっても変えていってもいいのではないかと考えています。子供たちが自分たちのやりたいことを選択して、18歳以上になった時に自分の道を選ぶようなことをできるだけ用意しておく。それから県域がすごく広くて、さきほど、県境にいるお子さんがほかの県の学校に行ってしまうという話がありましたが、長野県は山が多くて県域が広い、これを逆手にとって、学校に行き行って学ぶこともできるけれども、全県からとか県内からでもオンラインで学ぶというプログラムもあるよ。ということも魅力の一つになっていくのではないかと考えています。もう少し、普通とか職業とか全日制とか定時制とか通信制とかありますが、そういう制度をこわした学校みたいなものをモデル校として作って見たらどうかなあと感じております。

いずれにしても子どもたちが、自分の学びたいことを選ぶ、子どもたちの力を信じて、選べるというようなことをキーワードに考えて見たらどうだろうかと思っています。

というのは、旧第11通学区の教育懇話会にかかわらせてもらったのですが、その時に実際に中学生にヒアリングをしたことがありました。その時に中学生が言っていたのが「暗記型で学ぶ授業は本当につまらない。」「みんなでグループ学習のようなことで一つの事を話し合って学習をしていく授業が楽しい。」とか、それから、「高校ではいろんなカリキュラムを選ぶ制度が高校によってはあるよ」といったことを話した際に、子どもたちはそのことにとっても魅力を感じると言っていたので、大学のような高校を作っていくというのはどうか、と思っています。

【村松座長】

伊佐治様ありがとうございました。

生きる力がついていないのではないかという根本的なご指摘から、教育環境、教育スタイル、このあたりからの変革が必要なのではないか。

お話を聞いていて、なるほどなあと思ったのですが広いことを逆手にとってというご提案がありましたが、要は、今までですとマイナスと考えていたことをどうやって、プラスに転じるのかといのは、私たちが考えていくうえで示唆に富むお話をさせていただいたのではないかと思います。ありがとうございました。

つづきまして岩本様よろしく申し上げます。

【岩本 構成員】

地域・教育魅力化プラットフォームという一般財団法人で全国の高校の支援をさせていただいている者です。

ここまでの議論を聞かせていただいて、3点ほどお伝えさせていただきます。

一つ目は、この議論で何をどのレベルで目指していくのかというところですが、私も知事の発言に感銘を受けました。目指すべきは、長野県から新しい魅力ある高校を作っていくんだ、もしくは高校教育を作っていくんだという、そういう志だと。その一つの指標として、知事さんが言われた隣県に流れている生徒さんとかもいるということですが、これは悔しいことだと思いますし、長野県内の私立でとても有名で、いろいろ人を集めている学校をいくつか聞いたことがあります。たしかに県立高校であまり聞いたことがないということがありますので、一つの指標としたら、県立高校であっても他県からも生徒が来る、移住者もこういうところの高校教育がいいよといって来るぐらい、外に出るのではなく公立高校であっても、人、生徒もしくは移住者を含めて引きつけられるくらい、長野からやるというのであれば、そのレベルを一つの指標で目指しながらやっていくぐらいの高校改革に期待したいというのが一点目。目標のレベルの高さを示す指標というところでは。

2点目は特色や魅力を作っていくときに何がカギになるのか、というところでは。わたし、全国の高校だとか特に公立でも生徒を集めているような学校をみていくと、基本的には学校の中だけでやろうとしていない。多くは地域、身の回りの資源を最大限に活用にするんだ、地域にある、ひと、もの、こと、自然、文化、それを教育資源に変えていく。それを活かした魅力ある教育を作っていく、学校の中に閉じていない。特に都道府県立高校の場合は、地元の市町村だとか、地元の産業界というところと、どれだけ本気でタッグを組んでやっていくのかというところ。県立高校の教員だけでやろうとしていくのではなく、外としっかり協働していくというところがカギなのです。「コミュニティ・スクールをやっています。」とかいう学校が結構あるのですが、学校運営協議会みたいな協議会で話しあって、外の人はいろいろ口は出すけど、手も足も金も人も出さないみたいな、そういう会議をいくらやっても学校はよくなりにくいですね。どうせ口をだすのであれば、ちゃんと金出す、汗かく、手足動かす、一緒にやるという、協議会よりも協働をしていく体制をちゃんと作れているのかどうか。このレベルでないと、会

議体つくって終わりですとなってしまう。ちゃんとリソースを出して一緒に教育目標に向かってやれていますか。というレベルの協働体制を作っていく。

その時に、全国的にみてもカギになっているのは、学校と地域の関係者をつなぐコーディネーター人材。こういうところをしっかりとつなげる、コーディネーターできる人材などを配置してその体制を作っているところは、人事で教員がぐるぐる変わろうが、そういった動きを保っている。このコーディネーター人材が非常に重要で、あわせて資料の中でも地域にとっての高校の意義みたいなのところがありましたね。やっぱり地域側の視点で見たときに地域唯一の公立高校といえば、地域での持続可能で幸せな未来を作っていく、そういう人づくりの拠点が地域唯一の公立高校の場合、そういったミッション、期待を強く持つところです。地域にどうしたら卒業後帰ってきてくれるのか？というような問いなんかも資料に出ていましたが、将来的に県外へ出た子たちがUターンしてくる率みたいなのは何によって高まったりしたりしているのかというのは、一つは高校卒業するまでにどれだけ生き生きとした、幸せなこの地域で働くロールモデルとの出会いがあるかということ。

要は、卒業して都会に行く前にそういうことを知らない、「ここには仕事がない」「幸せに生きるのは都会だ」「そういう良い仕事はない」という思い込みやイメージで出て行って地元に戻ってこないというケースが全国でも多くあります。高校を卒業するまで地元で育っている中で、地域で「こんなふうに幸せに生きている」「生き生き働いている」「新しい仕事をやっている」そういうロールモデルたちに出会っていくと、長野県でも、長野県だからこそ、こういう生き方や幸せに働いたりできるというイメージを成人する18歳になる前にどれだけの子たちがしっかりと持てるかどうかは、将来のこの地域、長野県で幸せに生きる、長野県の社会作りに取り組むというか、若者の勧誘にもつながるのではないのでしょうか。

最後に3点目は、その地域を活用するという意味では、ここだからこそできる学びや教育をここにある資源を使ってやるわけですが、一方でどこでもできる教育とどこでもできる学びいうものもあります。それはこの地域でなくても、例えば数学や物理の法則は、長野でやっても北海道でやっても変わらない。大学入試に出る問題は変わらない。この非常に共通性の高いもの、地域性や特殊性、特色ではなく高校教育における共通性の部分はなるべく共有していく。これはオンラインや遠隔授業、通信制を使っても、この場所でなくてもどこでも学べるという部分をそれなりに共有化して、それを質の高いもので、どんな小さい村やどこにいてもこのレベルのものは共通に確認・知識の部分はオンラインやデジタルで、非常に共有化、効率的に個別最適に学べるようになっていくので、そういう部分は共有化していくことを通してどこでもできるものはそういったところでやりながら、よりリソースは一人ひとりの生徒たちと向き合い、ここだからこそできる学びやここだからこそ必要なものというところに教員だとか、よりリソースを振り分けていくという動きの中で共通性を共有化することによって、特色をそれぞれが出せるような時間を作っていくということは県がやるべき教育政策の根本的な戦略になってくると思います。

以上です。

【村松座長】

岩本さんありがとうございました。

最初にご指摘いただいた指標の話は、この会議がこうして具体的な政策をやったときに非常に重要な論点になってくるのでぜひ活かさればと思います。

2番目の口を出すだけではなく、汗とお金も出してほしいということは、協働の体制ですね。今回のこの議論でも学校をどうしようという、「学校の中の話」ではなく、外まで含めて本当に地域も一緒になって考えていくことがポイントだということは改めて感じさせていただきました。

また、コーディネーター人材。このコーディネーター人材自体をどのように育てたらいいのかということも論点の一つかと思います。

一番お伝えいただいたのが「生き生き」ですね。幸せのロールモデルを高校卒業までに感じていないのではないかと。逆に、感じていれば、また戻ってくるのではないかとのお話。非常に重要なご指摘をいただきました。本日の資料でも内堀教育長からのお話にもありましたが、教育振興基本計画、これは私も取りまとめに関わらせていただきましたが、目指す姿が個人と社会のウェルビーイングの実現。個とっても社会にとっても幸せになるというウェルビーイングを目指す。それを子供たちあるいは生徒が実感できることが非常に大事だという方向でご指摘いただいた点は、今県が目指している教育振興基本計画の方向とオーバーラップしているところと感じました。

また最後に「どこでもできる教育」ということ。前半で議論があった長野県だからこそこできる、長野県に特化した内容とともに、一方でこれは抑えなければいけない必要な部分、どこでもできる教育については効率的に多様なリソースを活用しながら進めたらどうか、そういう具体的なご提案をいただきました。

ありがとうございました。

関連していかがでしょうか？それでは石坂様よろしく申し上げます。

【石坂 構成員】

長野県PTA連合会から参りました。石坂と申します。

保護者の立場から発言させていただきます。子供が大学1年、高校1年、中学1年に3人います。

1番上の子は現在大学1年ですが、市立長野高校の卒業生。市立は総合学科の学校で3年生になるとほとんどの授業を自分で選択できる学校です。例えばスポーツに特化している子は午前も午後も体育という日もあります。また、スポーツトレーナーを養成している専門学校に出向いて一緒に授業を受けるなど、特色のある学びをしており、私の感覚では半分の生徒がスポーツに特化しているのではないかと感じています。うちの子も3年間部活をやってとても楽しく通っていました。大学は県外に行きましたが、とてもいい学校で選択肢があるっていうことはすごく重要なことだと思います。

2番目の高1の子は発達障害があり、小学校、中学校と支援学級に通っていました。私も知らなかったのですが、実は都道府県によって支援クラスに在籍しているだけで成績がオール1になるという都道府県がある中、長野県は普通に成績をつけてもらえます。このことに関しては本当に感謝しています。支援学級にいたってオール1になるということで、本来は支援を受けた方がいい子が普通学級に通うことで、不登校になるケースが生まれてしまうことが予想され、長野県が普通に成績をつけていることは、も

っと全国に発信してよいことだと思います。今、学校は、平均的にできる子を求めているように思います。特に入試はそうだと思うのですが、うちの子は、電気配線などにとっても興味がありますが、成績にばらつきがあり、本人の希望で工業高校にこの春から通うことになりました。高校には支援学級はなく、今まで10人ぐらいの支援学級で手厚く支援してもらっていたところを、40人の男子が教室に目一杯入っている工業高校でやっていけるか心配していたが、好きなことをやっているの毎日楽しく通っています。成績については、1回目のテストの結果が驚くほど良くて、こんなにできたのかと思うほどでした。授業参観に行ったら私は何を言っているかわからないと感じるレベルの数学の授業や電気系の授業に対して、本人は本当に楽しそうで、このように何かに特化した子を受け入れてくれる学校は非常に重要だと思います。ずっと病院の療育に通っているが、主治医からは坂城高校はとても良い学校だと勧められました。理解があって受け入れてくれる学校はとても大事だと思います。

一つ要望とすると、小学校の頃から高校受験に関しては何の配慮もないと言われてきました。「大学受験では、人の目が気になる・音が気になる方は別室で受験ができる。問題にふりがなが振ってある。読み上げてもらえる。問題の文字が拡大されている。また、時間を延長してくれるという配慮ができる学校があるが、長野県の高校の場合はほとんどないと思ってください。」と言われてきました。私が知らないだけで、学校によってはあると思うのですが、このような配慮がどこの学校でもできるようにしていただきたいと思っています。

以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。今、石坂様の方から、まず選択肢があることの重要性ということで、本日のキーワードである多様性というところにも繋がるお話だったかと思えます。

それから特別な配慮を要する生徒さんへの対応、これは長野県しっかりしているという、私自身もあまり気がついていなかった点ですね。ひとつ長野県として大事にしている点ということを理解できました。

それから工業高校、私は専門が技術でございますので、ぜひそういう子たちがどんどん活躍してくれたら嬉しいなと思いますし、それに特化できる学びですね。その好きなことにはまっていくっていう、今日前半でもいただいたそういうものが県立高校でもぜひ、また具体的な話は後ほど坂城高校さんの名前も出ましたので、ぜひご紹介いただければと思いますし、ただ一方で最後に御指摘いただきました特別配慮、いわゆるインクルーシブな教育ですね、そういった教育配慮みたいなことっていうのは、これは先ほどの基本計画にも掲げているところでもございますので、ぜひ今後ともこれは具体化等必要なところかなと思いました。

続きまして鳥谷越様よろしいでしょうか？

【鳥谷越 構成員】

松本蟻ヶ崎高校の校長の鳥谷越と申します。よろしく願いいたします。

私も大学を卒業して35年以上長野県の教員でずっと全県を回り、今蟻ヶ崎高校にいます。先ほど来、それぞれの高校が見えてこないということのご指摘をいただいて、これはいけないな、いつも私も思ってることなんですけれども、やはり改めてこのように御指摘をいただいて、再度やっていかなきゃいけないんだろうなと思っておるんですけれども、実は高校現場はパンフレットも作っておりますし、ホームページの発信も先生方にも本当にやっていただいて頑張っているんですね。

だけど、パソコンが、30分立ち上がらないという、ものすごくスペックが低いのがやっぱり公立高校ですので、勤務時間の入力を先生たちに今やってるいただいてるんですけど、私も古いやつを使うと、私毎日遅刻なんですね、立ち上がらなくて。

公立高校に与えられている教育予算の中で非常に難しい限界もあり、先生方も30分立ち上がらないホームページのビルダーで発信するの疲れちゃうんですね。

そうすると普通の業務に加えてこういうことっていうのは本当に疲弊に繋がりますが、一生懸命やっていただいています。

なのでぜひ私も発信をするという力はこれからもつけなきゃいけないですし、やっていかなきゃいけない時代だっていうのも十分わかっておりますので、またしっかり肝に銘じてやっていかなきゃなとも思っております。

それから私も含めて、私も子供2人おまして、もう社会人ですけれども、公立の学校を卒業しまして、高校時代に出会った学習であるとか人であるとか行事であるとか、そういうものによって自分の人生を決められたと思っております。

ですので、高校時代が本当に今の私を作っている、娘も息子もそうですけれども、高校時代があったからこそ、今があるんだなということで、やりがいを持ちながら仕事をしているっていうのがあります。

今の私のこの蟻ヶ崎高校の生徒たちを見ていまして、一生懸命頑張っているんだけれども、苦しくてっていう子もたくさんおりますけれども、総じて嬉しそうですね、とても生き生きしてるんじゃないかなと思っております。

それはですね、うちの学校はメリハリをつけるといいますか、行事もいくつかありますし、勉強にも一生懸命、生徒会活動も部活動も一生懸命ということで。全てやりたいものができる学校というのは少ないと思うんです。ただ、苦しいものにもどうやって壁に立ち向かっていくかという機会も与えながら、だけどほっと息抜きできる遠足だったり、外へ出ていく探究の時間があったり、文化祭があったり合唱コンクールがあったり、そういうところで子供たちがそこに向かっていくエネルギーから何かを発見するっていうのも、上手にバランスを取りながら学校の教育の中に取り入れていくっていうのがやっぱり大事なのかなって思っています。

勉強だけでは本当に疲れます。私だって嫌です。

だけど、やはりその先にこういうものがあるから頑張ろうっていうものが、一人一人の生徒たちが見つけながら頑張れているので嬉しそうな顔がいつも見られているかなとも思ってます。

はたから見ているより、もしかしたら大変な部分ももちろんあるんだけれども、子供たちが喜んでる姿っていうのを私達は見ていますので、やっぱりこういう姿があってこそその学校なんだなというふうに思ってます。コロナの3年間苦しかったときを経て、少しずつ回復しているっていうのも生徒たちには喜びですね。

いろいろな体験が一つ一つできていくっていうのは本当重要なんだろうなと思っております。

もう一つ、本校は普通科です。自分がなに者かわからない、本当にどうしたらいいのか全然わからないという子どもたちが「The 普通科」の高校に行きたいと思うのは当然かと思えます。

やはり中学3年生の段階で、自分の道筋を決められない、何だかわからない、普通科だったら行かれるというのがあっていいと思うんです。その普通科に来た生徒たちが3年間でこういう方向もあるよっていうのをいろんな経験から見つけていくっていうのも、普通科の大事な役割なんだなとも思っています。

例えば普通科の中にコース制を作るとか、何々科を作るとかっていう方法もあろうかと思えますけれども、私は「普通科」というものを大事にしたい、何もない「普通科」っていうのも大事なんじゃないかなと思うんですね。その中で特化しないものの中で、いろんなものを生み出していくっていう、そういうものも大事かなと思って、うちの学校もこれからその普通科改革ということで、どうしていったらいいかなっていうことで進めたいなと思っていますけれども、本当に大事なものを見過ごさないようにカリキュラムを組んでいきたいかなと思ってます。

本校は全県でもとても人気の高い学校になってます。この人気の所以はどこなのかなと思うと、やはり普通科であるということ、普通の高校生活を送りたいということを探求してきている子供がいるとすれば、それを大事にしながら学校作りもしていかなきゃなとも思っております。

以上です。

【村松座長】

はい、鳥谷越様、ありがとうございました。最初の方でいただきましたパソコンの話ですかね、この教育インフラへの投資はいろんな未来の話の前提として、ちょっと早急な改善が必要だと思います。このあたりは知事にぜひよろしく願いできればと思います。

それからバランスの取れた教育っていう、先ほどいただきました石坂様の方から工業高校で専門のところではまり込んでやってたっていう教育、こういう良さと同時に、何も特化しないというんですかね、先ほどの普通科であるということの良さ、特化しないことの良さ、また今日のお話でもあります普通科とそうでない専門科の良さみたいな話をいただけたのかと思っております。ぜひこの後の議論を生かしていければと思います。

先ほどお話にも出ました坂城高校の取り組みにつきまして、小木曾様、ぜひご紹介いただけますでしょうか？

【小木曾 構成員】

はい、坂城高校がいい高校だというふうに横から聞こえてきて、坂城高校って他にあったんだっけと思ってしまいましたけど、実際いろいろ、中学校の先生方とかも見に来てくださったりして、評価をいただいていたりする部分もあるんですけどまだまだなところが多いですが、特別配慮というか、いろいろ特性を持つてる生徒の対応について

は、そういう生徒も非常にたくさん入ってくるので、先生方もこの前も研修等もありましたし、理解しながらやってるのかなというふうには思います。

試験に関してはルビ振りとかは全然やったりしてます。この会の中でも問題提起したのかなと思うんですけど、外国籍の生徒が非常に、ある程度の数が入ってくるようになってまして、その子たちをどう育ててあげるかっていうのが非常に今課題となっています。

入試のところではある程度の力があるっていうことで入ってこられるんですけど、実際日本語の力であるとか、高校の授業の中でどれだけ理解できたかっていうのは、甚だちょっと疑問符がつくような状態でして。

それでも日本語を専門に教えられる教員がいるわけではないですし、それに時間はなかなか割けないってところもあります。

もっと大きなシステムのなところで、そういうのをフォローしてあげられる学校自体を作ったり、学科自体があるとか、カリキュラムでも対応できると思うんですけど、そういうところは本校の課題感としてもありますし、ちょっと外国籍であることも広く捉えた特性かなと思うんですけど、そういうところもカバーしながらやりたいことができるっていうのは非常に良いのかなと、その子たちが今スタートラインに立てていない状況にあるように思うので、そういう部分の環境を整えてあげることも必要だなというふうに思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。ご意見をいただきました外国籍の生徒さんが、先ほどちょっとインクルーシブの話にもリンクしてくるところありますけども、こちらもなかなか多様性という点では、ますます生徒さん自身の対応になっていく中で、そういったものをどうやって学校現場で対応していくのか、これもより大きな議題かと思えます。ありがとうございました。そのほか、坂城高校さんの魅力はよろしいですか。

【小木曾 構成員】

だんだんと出していきます。

【村松座長】

順次、お願いいたします。

その他いかがでしょうか？はい、赤荻さんよろしく申し上げます。

【赤荻 構成員】

伊佐治教育長さんもおっしゃってたんですけど、生きる力、生きる力がある子が少ないというか、私的には生きるイコール稼ぐ力なのかなと思っていて、稼ぎ方を知らない子が多いと感じてます。

アルバイトしている子も多いと思うんですが、大体アルバイトの間って店長の言うことを聞いて働くみたいなのが多いです。

この会場にいらっしゃる皆さんでサウナが好きな方とかがいらっしゃいますか。私、今年、日本一周以外で長野県に来るのが2回目で、2月の結婚記念日のときに高山

村にある松川館というところに、まあまあ高いお金払って、サウナ旅行に行くくらい、私サウナが好きなんです。例えば、稼ぐ力をつけるというところで、学校で実際にサウナ施設を作ってみて、生徒たちがどんな施設にしたらお客さんが来るかとか、どうしたら長野県のいいところを活かせるかみたいな、自然に囲まれた中でサウナできる場所って日本でも結構すぐ割と有名になれることが多いので、結構お客さんが来たりすると思うんですけど、実際に地域の皆様の協力をしてもらったりだとか、生徒の皆さんで力を合わせて施設を作ってみて、実際にお客さんをSNSとか使ったりいろいろな工夫をして呼んで、お金を払ってもらおう。お金を払ってもらって、かかった予算を引いて、上りが出ると思うんですけど、例えば上がりが出たら、その分修学旅行を豪華にするとか、何か成功体験をさせてあげるのはすごいいいのかなと。もちろん成功することだけじゃなくて失敗することもあると思うんですけど、社会に出てからその失敗した経験も、ここではこうだったから次はこうしてみようという力にもなると思いますし、そういった稼ぐ体験をしていく中で、私はこういうのがあってるのかもしれないとか、将来の夢とか目標とか自分の進む道に繋がることもあるような気もするので、稼ぐ体験と、あとは地域の良いところを組み合わせたり、生徒さんたちのやりたいことを組み合わせる稼ぐ体験をする授業や、もしかしたら部活なのかもわからないですけど、そういう経験をさせてあげたらいいのかなとも思いました。

ちなみにさっき、高校生でサウナ作っている子いるのかなって気になってインターネットで調べたら、大阪府に住む高校生の子で、去年の末に自分で作ってる子がいたんですね。ただ、最初は自分の学校で作ろうとしたみたいで、自分の通ってる高校に資料を作ってプレゼンしたらしいんですよ。でも断られちゃったそうで、ご両親を説得して作ったみたいなんですけど、一応ちゃんとWebニュースになったりとかしてるので、結構、「わあっ、長野県の高校すげえな」ってなる、話題作りにもなるんじゃないかなと思いつきの提案でございました。

【村松座長】

赤荻様、ありがとうございます。今の稼ぐっていう実際に、いかに、たぶんリアリティのある課題に取り組むっていうそういうことの大切さをご指摘いただいたかと思えます。サウナづくり面白いですね。もしかしたら、今度はサウナ作りプロジェクトみたいな、県内ちょっと流行るかもしれないですね。ありがとうございます。

ちょうど私も今、これ高校というより、中学なんですけども、県教委さんと「メーカー」って言って、本当にもの作りと色々なものを組み合わせた教室なんかを昨日も今日も、非常に盛況だったんですけども。その中に来てる屋代の付属中の中学生さんですかね、私どもの大学でやってるジュニアドクターという講座なんかに来てたんですけど、非常に面白かったと。3Dプリンターとかそういうのがどんどん欲しくなって、学校にこういうスペースを作ってくれっていうことをお願いしたらしいんですね。そしたら場所はあるけれども、金はないから自分たちで何とかしろと。なので確か、千曲市のスタートアップの補助金とかにですね、中学生が行ってプレゼンして10万ぐらいゲットして、私のところへどんなプリンター買ったらいいですかって連絡が来まして。それが去年の話なのですが、つい最近ニュースになって、また更に感心したのは、その子たちがそれを使って社会に還元しようって言って、高校生なんかも一緒にやっているっていつ

てましたけど、小学生向けにこういう科学教室みたいなものを、そういうものを使ってやってるっていう、そんなようなニュースが流れて、今のお話を聞きながら、自分たちで立っていくというか、リアリティのある課題っていうものっていうのは、多分いろんなところで展開できるし、これ、長野県の、今、探究県としてやっているところのちょっと大事な一つテーマになるのかなと、今お話聞いてて、思いました。ありがとうございました。

さていかがでしょうか。それでは、堀井さん。

【堀井 構成員】

今の赤荻さんのお話、座長のお話がとてもいいなと思って。稼ぐ経験ってすごく大事だと私も思っていて、私は公民科の教員だったのでそういうことを勉強してしていました。教員になる前、企業の会計責任者などもしていました。やはりどこでも成功体験や前に進めていく体験がすごく大事だと思っています。今そういう学校や活動もあるし、あともう1つは今、村松先生がおっしゃったようにやりたいことを突き詰めた結果、お金が必要になるから そのためにどうすればいいかという経験があってもいいと思っています。そういったものが組み合わさっていくと、むしろ教育に多様性が生まれて、いろんな子が映える学校だったり、場ができると思います。先ほどお話ししたように、やりたいことを突き詰める、また社会貢献作業が大好きな子がいる、社会貢献することによって自分が満たされるお子さん、お子さんに限らず人間誰しもそうだと思います。何かをやりたいというより、誰かのためになりたいという方もいらっしゃるわけで、これをやりたいっていう方もいらっしゃるわけで、そういう若い人たちに、どれだけそれを突き詰める環境を私達が懐深く持てるかっていうのが勝負だと思います。その結果、稼げたり、あるいは仮に稼げなかったとしますよね。失敗体験です。失敗体験をするのに、稼ぐことが目的になって失敗するとその後どうすればいいか行き詰まってしまうかもしれない。事業主をやっている方もそう思うと思います。しかし、自分がやりたいことを突き詰めて、その結果、稼げなかった。稼ぐことが目的じゃないから、失敗したとしても、そのときにリフレクションとって、なんでできなかったんだろうっていう探究がもっとさらに深まると思います。何が必要だったんだろう、どうして自分はこれをどうしてもやりたいのにできないんだろうっていうことを今度突き詰めていこうというところに学びが生まれると思います。もしかしたら基礎学力ではないかもしれませんが。数学の力がないからかもしれないし、商業の知識がなかったから、マーケティングの知識がなかったからかもしれない。ああそうなんだ、世の中ってマーケティングっていうものがあるんだと知ることができる。

長野県は素晴らしい人々をたくさん輩出しています。そういう人たちと学びたいと思った子どもたちを、先ほどいろんなところでお話が出るオンラインで繋いでみるとか、世界中に繋いでみるということができると思います。私は赤荻さんのアプローチとは逆に、反対側から突き詰めていきたくて、どうしてもやりたいことというものをまず見つける必要があると思うので、鳥谷越校長がおっしゃったように、普通科があって普通の中でいろんな体験をして、これやりたいと思った人を拾って、じゃあ、それを突き詰めるためにはどうすればいいかという環境を一緒に作る。それがもう一つあると思

うのは、地域作りもティーンエイジャーやそれより若い人たちと一緒にやるのがいいと思っております。

私も人生後半入っていますけど、ここにいらっしゃる方の平均年齢は まあまあ高いですよ。それで例えばティーンエイジャーの高校生、15歳の子が今後の社会で生きていくためにどうするか本人たちが考えるっていうのは絶対必要だと思っていて、別に若い人たちだけで考えてくださって言うってわけではないです。人生100年で、いろいろな世代の人たちが一緒に考えて社会を作るときに、この我々の年代よりも若い人、先ほどもちょっと重ねてお話することになりますけど、意見や実現に対する協力、支援でもサポートでも教えるでもなく、一緒にやるっていうことをやっていくことが、ひいては若い人たちのやりたいことになって、それが稼ぐといういわゆる企業資本主義的なものだけではない社会を作る経験になると思います。この長野県内で聞いてらっしゃる方いらっしゃると思うので高校生や中学生と一緒に村を作るっていう腹をくくれる自治体さんがいらっしゃいましたら、私手弁当で行かせていただきますので、ご一緒させていただけたらと思っています。ありがとうございます。

【村松座長】

ありがとうございます。先ほどの稼ぐというところから失敗体験というところまで御示唆いただきました。そして今いただいたお話の中で一緒にやるというんですかね、先ほど岩本様の方から口を出すだけじゃなくて汗とお金みたいな話もありましたけれども、生徒自身が一緒に地域を作っていく、社会の作り手になるというんですかね、その大切さ、必要性みたいなご提示いただいたと思います。ありがとうございます。

ここまでのところの議論で荒井先生どうですかね、少しいろんなご意見いただきましたが、俯瞰したところいただければと思います。

【荒井 構成員】

信州大学の荒井でございます。皆さんのお話をお伺いしながら考えたことを、三つの観点からお話しさせていただきたいと思います。

一つ目は、高校生や若者世代の位置付けに関してです。本日のテーマは高校をどう位置付けるかという話ですけれども、長野県において学習者主体の「学びの県づくり」を推進していくならば、高校生や若者世代をどう位置づけていくかがポイントになると思います。昨今、今の社会の責任を次の世代に担わせていくといった「社会の担い手論」が多いですが、今後は、高校生や若者世代をこれからの社会を共に創造していくパートナーとして明確に位置付け、若者世代の育ちと学びのための支援あり方を具体的に考えていく必要があると思います。「社会の創り手論」です。高校生や若者世代を位置付け直すと、彼ら彼女らは、教育の対象というよりは、学びの主人公になります。言い換えれば、学びのコントローラーを渡すだけではなく、人生というゲームのルールやゲームの世界観それ自体を創造していくような存在として位置付けられていくことになります。そして、そこでの学びは、いわゆる人生を生き抜くための「〇〇力」といった資質・能力観に矮小化されてしまうようではだめで、自己調整学習に焦点を当てた学びや人生を「楽しむ」ウェルビーイングとの距離感にも目配せをして、高校における学びのイメー

ジを刷新していく必要があると思います。当然、そのためには教育制度や学校制度をもっとフレキシブルなものにしていく必要があります。制度のストレッチです。

二つ目は、高校教育の特色・魅力化の方向性に関してです。学校の「特色」を出すために尽力するのは学校になりますが、学びを「魅力」的と感じるか否かは「学びの当事者」次第です。先ほど鳥谷越委員のご発言にありましたように、「自前主義」の限界が露呈しつつある中で、学びの「需要者」と「供給者」という捉えではなく、共に学びを創造していく関係性が今後重要になると思います。また、岩本委員が「協議」体制と「協働」体制の違いについてお話しされていましたが、現時点の高校が備えている特色を今後より磨いていくとするならば、その特色の「内容」とその特色を伝えていくための「方法」に関する仕組みづくりを進めていく必要があります。その仕組みを「駆動」させるリソースに関して、現在の教職員スタッフだけで限界があるならば、そこは県がしっかりと予算計上し、教職員以外の方々にそれを専門に担う人、お金、リソースを投入できるか、コーディネーター人材等の育成・設置等の検討が必要不可欠となると思います。他方、現在の高校に残念ながら「特色」がないといった評価がなされるのならば、時間割、単位、学び方、学習環境、カリキュラム、人事など、抜本的改革が必要となると思います。

最後は、行政の役割に関してです。学校は戦後以降あらゆる業務を「荷物」として背負ってきており、自分たちで自分たちの荷物を下ろすことができなくなっている可能性が高いです。教育課程においても「カリキュラムオーバーロード」の課題が指摘されていますが、今後、子どもの学習環境を整えていく場合、3つの論点に即して検討を加えていくことも一案です。一つ目は、「自然的環境」、長野県は他県都の比較において相当アドバンテージがあると思っています。お金で買えない自然というリソースがあるので、これを最大限生かさない手はないと思います。二つ目は、「文化的環境」です。いわゆるICTツールを含めて、学習文化や風土を作っていくためにどのような環境を整備していくかという論点です。三つ目は、「人間的環境」です。現在の教職員の勤務状況、身分待遇などが持続可能ではないとするならば、教職員の「エンパワーメント」が今後より重要となります。現在、これが決定的に不足していると思いますので、新しい学びを実現するための、冒頭知事の話にもありましたが、元気が出る話を教職員に示していく必要があると思います。

最後に、多様な選択肢を増やした後の課題に関してです。先ほど多くの委員の皆さんから、選択肢が必要だ、選べるということが必要だといった発言がありましたが、「選択肢を増やす」ということと、その「選択肢を選択できる」ということは別の話です。選択肢を多様化していくならば、実質的に多くの人を選択できるように環境を整えていく必要があると思います。今次の長野県の教育振興基本計画でも、「ウェルビーイング」や「一人の子どもも取り残されない」というフレーズを使っておりますので、その実質化を図っていく必要があると考えています。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。

冒頭お話しいただきました担い手から作り手ということは、今回の非常に大きなテーマです。先ほどの地域を作るという話にも関係してきますし、一方的に社会のいろいろな

責任を担うのではなく、自分たち自身の地域社会を自分たちが作り手に変わっていくというのが、大きなキーワードだと思いました。

作り手に変わっていくという点で、さまざまな選択肢、多様性、学びの中身にも関わる部分ですが、生徒自身が自分たちで学ぶことを選択でき、自分の学びを自分でコントロールできるような、学びのコントローラーのようなものを持っていることが必要との意見いただきました。

自前主義の限界、地域との連携を学校で全て行っていくことは限界にきているということについて、これは非常に痛感するところです。

教員のエンパワーメントのお話をいただきましたが、全国の教員養成大学の入試倍率が落ちてきています。長野県もそうですが、全国の教員採用試験の志願者倍率落ちていて、これは学生たちが、教育に対し、仕事が大変だというイメージを強くもっているためだと思います。そのような状況を変えていくことは行政の仕事、またそれをより魅力的にしていくことは学校現場の仕事で、教員をどうエンパワーメントしていくのかということは重要なテーマです。その時のリソースとして、自然環境、文化的環境、人的環境があり、さまざまな観点から考えていく必要があると思います。

多様な生徒が、それぞれ選択的に進めるよう考えていくべきで、仕組みを回す仕組みが必要との意見もいただきました。

【安原 構成員】

私からは4つ提案をさせていただきます。

まず、「教師の待遇改善」です。ネットで調べたデータのため正しいのかはわかりませんが、教員の平均給与は、長野県は全国で27位です。例えばこれを1位にするだけでもその意義はすごく大きいと思います。ちなみに1位が東京、2位が鹿児島です。高校教師には塾講師がうらやむくらい待遇の良さがなければいけないと思います。

それから稼ぐ力生きる力に関連し、「助けて高校生制度」というものを提案します。簡単に言えば高校生のインターンシップのようなもので、地域のニーズと高校生の体験学習を融合したものです。例えばただの農業の体験というよりも、アルバイトのイメージです。ある程度学力がある生徒は、大学などの研究機関、あるいは図書館や市役所など、生徒それぞれのニーズにあった場所で行うのもいいと思います。資料にもありましたが、民間企業からは高校生にもっと就職してほしいという声がありますが、工業高校志望者は減っています。それは、こどもたちが工業高校に入ってどうなるかというイメージが描けていないからです。そのため、民間企業の商品開発の手助けなどの経験をしてもらうのです。大学では行っているところがありますが、それを高校生の段階で行っていく。難しいかもしれませんが飲食関係ということも考えられると思います。

大切なのは、生徒たちには時間がないこと。そのため、それらの「体験を単位に変換できる制度」を設けることができればいいと思っています。

もう一つは、そもそも、このような会議は我々が開いても高校生の声は届かないかもしれない。そこで、「高校生会議」を提案します。学校ごとではなく、各学校から代表者を募り、1年、2年程度のスパンで高校生が考えていく。一つの部活のようにしてもいいです。高校生が考えるのであまさもありますが、県庁や市役所で一定の学習をしても

らってもいいと思います。いわば、政治家づくりです。立派な政治家を輩出するためには、行政に携わる経験をさせることがいいと思っています。

それと、前に述べました、広報活動ですね。

教師の待遇改善、助けて高校生制度、信州再生高校生会議、そして広報活動の充実の4つを提案させていただきます。

【村松座長】

ありがとうございました。

1点目の教員の待遇改善については、ぜひご検討いただければと思います。

助けて高校生制度という具体的なご提案をいただきました。私が知っている範囲で言うと、須坂創成高校がデュアルシステムという形で、かなり企業と連携しており、非常に充実していると感じています。こういったことを単位での組み合わせも含めまして、具体的な制度という形で検討できたらと思います。

それから3点目の高校生が参画するのは、先ほどの担い手、作り手の話にも関係してくるかと思います。高校生自身に取り組んでいく。今までちょっと近いような取り組みがあると思いますが、それを単発のイベントではなくて、継続的にできないかという話でございました。

今、先ほど助けて高校生制度の中で農業の話もありましたのが、山下さんどうでしょうか。このあたり何かありましたら、お話しいただければと思います。

【山下 構成員】

ちょっと話が飛んじゃうかもしれないんですけど、私りんご農家に嫁に来る前にフランスで1年間ワーキングホリデーをしております。そのときに結構農業現場って高校生、学生さんがいたんですね。夏休みの時間を使って農家にきて1ヶ月ぐらい農業する。それが実際に高校の単位とか、就職活動ですね。大学生であれば、そういったインターンを経験したよってというような結果として、紙1枚サインしてもらうんですけど、それで一つ認められるみたいなことがありまして、結構高校生の子たちと一緒に、私も働いていたので一緒に働く機会もあったんですけど、非常に面白いなと思っていました。ちょっとそれを思い出しました。

今やっぱり農業現場で実際に農業体験ということで、小中学生とか受け入れってというのは結構やってるんですけども、田植えであれば実際に手で植えてみようとか。いやでも実際にお米農家の方がおっしゃってたのは、今そんな田植えやんないよ、です。機械で全部やるんだから。子供たち機械に乗せて田植え経験させたほうが喜ぶ、圧倒的に。あんな苦しい農業だけ見せたって、農業やりたいなんて思わないよって言って、それは確かにそうだなって思ったんですよね。いい面、悪い面あるのでやっぱり苦しいところを経験させるというのも大事だとは思いますが、もっと楽しいんだよって。手で植えるってというのはね、泥んこになって遊ぶっていう面もあるのでそういう楽しみもあると思うんですけど、機械でワーツってというのも結構爽快って言うんですかね。やっぱり子供、男の子なんか特に機械に乗るのがすごい喜ぶので、そういった経験をするとか。そういう農業体験というのはどうしてもお膳立てされているところも大き

いので、実際に1か月とか、短くても1週間ぐらいがつつりやってみるとか、そういったことをぜひ高校生にやっていただくといいなというふうに思いました。

【村松座長】

はい、山下さんありがとうございました。今、農業体験とかですね、どうしても道徳的に陥りがちなところがあるから、そうじゃないリアリティ、今日いろんな皆さんの話でもリアリティのある取り組みとか、そういうのに通じる場所だったかと思います。ありがとうございました。

残り時間も少なくなってまいりました。あと最後お一方、もしこれはって方いましたら、お願いできればと思いますがいかがでしょうか。オンラインからでも結構でございます。

よろしいでしょうか。今日だけじゃなくこの後も懇談会は続きますので、今日の話も踏まえて、さらに進めていただければと思います。ありがとうございました。

そうしましたら、ちょっと今日の会議のところ、少し全体を見て簡単にですが、まとめさせていただきます。本日のテーマは「これまでの高校とこれからの高校」ということで、高校の役割について議論いただきました。生きる力をやっぱりつけなくちゃいけない、生徒が自立的に稼ぐ力とか、社会との接点、リアリティ、地域との繋がりというお話いただきましたけども、そういったところを通しまして、社会の担い手ではなく、作り手を育てるべきだろう。そしてそれは、生徒自身が自分たちで学びを選択していくような、そういうことが必要だと。また幸せのロールモデルっていう話ありましたけれども、こういう先行きの話も含めて、生徒たちに対する学びの姿とか、その幸せを感じられるような、まさにそういったことを高校が実現していく、そういう必要があるかと思います。学習者主体で話が展開されたと思います。

普通科、専門学科につきましても、具体的ないろんなお話をいただきました。専門科がもう好きなことをとことんやっていくっていうその良さ、素晴らしさは、先ほどのインターンとかのいろんなお話とかでもございましたけれども、それで社会とか地域と繋がって深めていくっていうと、多分専門学科って、非常にそういったものの接点とか間口の広いのかなと思います。そういうところでの専門学科としての役割。一方でお話をいただきました普通科ですね、特化しないことの逆にそういう良さもあるんじゃないか。そして普通科だからこそ、学べる良さですね。これは2択というよりもそれぞれの良さ、そういうのがあろうかと思います。そういう役割についてお話をいただいたかと思います。

子供や社会、地域の視点からということでもいろんなご意見をいただきました。とりわけですね、口・汗・お金の話ではないですけど、学校が自前でやっているのではなくて、地域と一緒にやっていかなければいけない、自前主義の限界がある。そこを一緒にやっていくための仕組み、そういうものをちゃんと作っていくべきであろう、ということでもございました。このあたりは非常にこれからの具体的な施策を進めていくうえで大きなところかと思います。

また、特殊化と魅力化のことについてもお話をいただきました。特色というのは高校側で、魅力というのは生徒自身が感じるものですね。私達のところで作っていくって

うのはどういう特色を出すのか、だけどそれは最終的な指標として、指標の一つになろうかと思えますけれども、そこで学ぶ生徒さん自身がそこをどうやって魅力に感じて、そして作り手に変わっていく、そういった学校教育というものを描けるか、いうことでございました。これから求められる学び、適切な建物といった様々なご意見をいただきました。インクルーシブの観点から多様な生徒に対しての対応、それから選択肢がたくさんあるということの多様な学び、一方で教室環境とか教室スタイル、先生方のパソコンといったICT環境の話など、学びを支えるベースになるようなインフラ系に対応する必要があります。そして地域とも一緒になりながら先生自身をエンパワーメントとしていき、そしてともに未来を作っていく、そういった姿が描けていることが非常に大事だなと思えました。

本日、本当に限られた時間ではございましたけれども、非常に皆様のそれぞれの立場から貴重なご示唆をいただいたと思います。これを踏まえ、次の第2回のところでは、県立高校の入口出口というステップでいければと思います。最後にこれを踏まえまして、知事から一言いただければと思います。

【阿部知事】

どうもありがとうございました。一言、三言くらい。村松座長始め、皆様ありがとうございました。非常に刺激をいただいたことに、まずは感謝申し上げたいと思います。ちょっと私の頭の中で少し考えたことは、やっぱり特色出すのが大事だよね、特に長野県らしさだそうね、っていうところは皆さん共通かなって。長野県では「信州やまほいく（信州型自然保育）」という認証制度を初めて作ったんですけども、今いくつかの他県でも同じような取り組みが広がりましたが、私のそもそもの発想は東京みたいな大都市が逆立ちしてもできない制度を作っちゃえっていう思いであります。そういう意味では長野県の強みという特色を生かして、この高校のあり方に繋げるかっていうのが、一つ重要な視点だというふうに思っています。

それから高校生、生徒たちの主体性、当事者性っていうのもほとんど共通したご意見かなというふうに思います。どうしても我々軽んじると、客体として見てしまうことがあります。もっと子供たちを主体としてしっかり位置づけて、私は学びの県作りってずっと言ってるんですけども、教育とあえて言わないのは、教育は教える側が主語になっちゃうので、学びという言い方をよくしてますけども。そういう意味では、子供たち、生徒たちの主体性、当事者性っていうのは、非常に重要だということを、改めて確認をした思いがあります。

また、地域との繋がりが不可欠だというのが、ほとんど皆さんの共通の感覚だというふうに思います。どうしても学校の先生方は真面目なので、自分たちが頑張りすぎるとい話もありましたけど、もっと地域とフラットに繋がってほしいというのが私は思いですし、相当地域の皆さんと市町村長との話で感じてるのは、地域の皆さんは待ってる感じがしてます。学校来てよと、高校来てよと、自分たちで飛び込んできてね、っていう感じが非常に強いというふうに思ってるんで、これはちょっと学校側でもう少し意識してもらえるとありがたいなというふうに思います。

それから発達障がいの子供とか外国人とか、そもそも子供たちの特色、特性に合わせた、学校側に個性を持たせるのも大事だけど、いろんな子がいることをちゃんと認識しま

しょうね、っていうことも重要だなというふうに思います。学校の設備とか教員の処遇をしっかりとしろっていうのは、冒頭言った私の役割なんですけど、ぜひ教育委員会にはしっかりと要望してもらいたい。予算要求してもらえないと、私も予算措置できないので。ぜひよろしくお願いします。

その点について、私一点だけ申し上げるとですね、多分共通してたのは学びのスタイルっていうものも変わらなきゃいけないんで、実はそこが一番今日重要ではないかなというふうに思って伺ったところでいます。例えば伊佐治さんから、私も最近注目してるのは通信制高校多いよね、そういう中で、学校のあり方、堀井さんもおっしゃってた、箱に押し込めて机に縛るといって、まさにあの工場型の教育のあり方っていうのを、まず変えなきゃいけない時代になってきてるんじゃないかなというふうに思ってますし、岩本さんにおっしゃっていただいた、まさにどこでもできる学びとそうじゃない学びを、やっぱり意識して分けるってのは非常に私も重要だと思います。

オンライン授業でも例えばハーバード大学の先生の授業だって、オンラインで受けようと思えば受けられる時代で、なぜみんな同じことを分散してるんだっていう、極めて非効率じゃないかなというふうに思ってます。そういうことを考えれば集中的にやるべきものと分散的にやるべきものっていうのを、意識的に峻別していかないと、限られた資源を有効に活用できないというふうに思います。そういうことを考え、ぜひ教員の処遇改善には前向きに知事の立場として取り組みたいと思いますが、それには教員のあり方っていうこともぜひ考えていかないと、また新しい教育をただ単に今の教育にプラスするだけだと、先生の数を倍増しても多分足りなくなるというふうに思いますので、そういうことを考えれば先生の役割はやっぱりどうするのかということは、これまさに県民のコンセンサスをいただきながら解決できる話だなというふうに思っています。

本当に今日非常にいろいろご指摘、ご示唆をいただきましたので、教育長ともしっかりと問題意識を共有しながら、次回以降の検討にも繋げていきたいというふうに思います。雑多な話で申し訳ないですけど、私の意見というかですね、受け止めをお話させていただきました。大変ありがとうございます。

【村松座長】

阿部知事ありがとうございます。本日の会議でいただいてお話を受けまして、2回以降深めていきたいのでよろしく申し上げます。以上をもちまして本日の会議事項は終了となります。事務局の方に進行をお返ししますのでよろしく申し上げます。

【事務局】

村松座長、構成員の皆さん、議事のご協力ありがとうございました。事務局から二点連絡がございます。

まず一点目ですけれども、今後の日程についてですけれども、次回の懇談会は8月上旬の開催を予定しておりますので、また具体的な日程について、改めて調整をさせていただきたいと思っておりますのでよろしく申し上げます。

二点目、冒頭でも申し上げましたが本日の議事録につきましては、県のホームページに公表する予定でございます。皆様には事前にその掲載内容のご確認をお願いすることもございますので、よろしくお願いたします。それでは長時間にわたって本当にあり

ありがとうございました。以上をもちまして、本日の懇談会を終了いたします。ありがとうございました。